

平成21年 5月14日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18790395
 研究課題名（和文）アクションリサーチによる青少年の「性に関するリスク認知」尺度の開発とその評価

研究課題名（英文） Development and validation of the sexual risk perception scale.

研究代表者

本間 隆之 (HOMMA TAKAYUKI)

金沢大学・薬学系・助教

研究者番号：90401893

研究成果の概要：

性交渉に付随して生ずる可能性のある計画外の妊娠や性感染症に対して、大学生はその危険性をどのように感じているか（リスク認知）を測るための質問項目群を開発するとともに、その質問項目の妥当性、信頼性の評価を行った。「リスクの身近さ」、「コンドームの外的効力感」、「予防行動をコントロールする自信」、「コンドーム使用当然」の4因子に基づく10項目の尺度を作成した。さらに追跡調査により尺度の妥当性・信頼性を確認した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	210,000	2,510,000

研究分野：健康教育

科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学・健康科学

キーワード：健康教育、性に関するリスク、尺度

1. 研究開始当初の背景

高校生や大学生に対する「性に関する予防」教育は、高等学校の養護教諭や保健師が少ない情報の中で知識の提供を行っているのが現状であるといえる。しかし、知識の提供だけでは行動へとつながる認知の変容までは困難であり、教育効果の評価も難しい。そのため、青少年のニーズに合致しているかに関

して適切な判断ができず、一方通行の情報提供になりがちである。性感染症が蔓延しているなかで、感染や望まない妊娠を未然に防ぐための適切な予防行動を取るためには、彼ら彼女らの認知や現状を把握した上で、認知および行動の変容を目指した教育が提供されるべきであると考えられる。これまでに、心理的要因と感染リスクのある性行為との関

連に関する研究は数多く論じられてきたところである。これに関して性感染症とそれらに関する認知を測定する心理尺度や予防行動を測る試みがなされてきたが、性感染症と計画外妊娠の両リスクを鑑みた実用的な尺度は未だ開発されていない。両者の測定が必要な理由は、青少年は必ずしも性感染症のリスクのみを評価してコンドームを用いた予防行動を行うのではなく、計画外の妊娠や早漏対策としてコンドームが使用されることが明らかになっているためである。

2. 研究の目的

本研究では、性行為時に適切な予防行動をするか否かの意思決定をする際は、性行為をすることによって生じる性感染症および計画外妊娠のリスクがどの程度であると認知しているか(リスク認知)を性に関するリスクとしてとらえ、コンドーム使用の予防行動に向かう一要因として測定することを試みた。さらにはその妥当性、信頼性を検証し、青少年の現状把握や教育効果の評価に応用可能な尺度の開発を目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、まずフォーカスグループインタビューや質問紙による自由記述や文章完成法などの質的アプローチによって「性に関するリスク認知」の解明を行った。次に、得られた結果に基づき尺度項目案を作成し、妥当性および信頼性の検討を行ったうえで最終的な尺度を完成した。

(1) 質的方法によるリスク認知の解明

高校を訪問し研究の意図と研究への参加協力を呼びかけた。大学および周辺の高等学校で研究参加者を募集し、フォーカス・グループ・インタビュー (FGI) を複数回セッティングし、「性行為とその危険性」についての話し合いとブレインストーミングを行った。FGI 中の会話は録音し、テープ起こしを専門の企業に依頼し、逐語録化した。また、FGI の対象者に対して質問紙調査も合わせて行い、FGI では把握し切れない項目も自由記述や文章完成法で回答するように依頼した。こ

れらの調査によって得られたデータは質的内容分析法を用いて概念のカテゴリーを抽出した。質的・内容分析法とは、カテゴリーがデータの詳細な吟味から帰納的に抽出され、そのカテゴリーは必要に応じて修正・変更されていく分析法とされる。得られたカテゴリーを吟味することにより、リスク認知の構成概念を質的に抽出した。得られた構成概念を基に暫定版「性に関するリスク認知」尺度項目案を作成した。

(2) 暫定版「性に関するリスク認知」尺度の作成

得られた暫定版尺度項目を用い、質問紙調査を行なった。質問紙の構成は、本研究についての説明や倫理事項が書かれたカバーレター、「生活行動に対する保健行動の優先」尺度、暫定版「性に関するリスク認知」尺度、性に関するリスクにまつわる知識、属性(年齢、性別、性経験の有無、予防行動(コンドーム使用頻度)、性感染症の罹患歴とした。質問紙及び封筒は印刷所に依頼して印刷、製本した。回収した質問紙は JIS Q 15001「個人情報保護マネジメントシステム要求事項に準拠した業者にデータ入力を依頼した。質問紙調査の分析方法は、欠損値の解析、項目ごとの回答パターンの解析、検証的因子分析、クロンバック α 係数による内的整合性からの信頼性の推定、収束的妥当性、弁別的妥当性の検討、基準関連妥当性の検討とした。暫定版「性に関するリスク認知」尺度項目案から尺度を作製し、調査を行った。質問票の内容はフェイスシート、セルフ・エスティーム尺度、性に関するリスク認知尺度、コンドームの効力感、性に関する知識・教育の経験、属性(年齢、性別、性経験の有無、予防行動、性感染症の罹患歴など)とした。

(3) 「性に関するリスク認知」尺度の評価

ベースライン調査の2ヵ月後、同じ参加者に再度調査票への回答を依頼した。ベースライン調査の結果と比較し、「性に関するリスク認知」尺度の信頼性妥当性の検討を行った。調査票は何れも匿名であるが1回目と2回目の調査票は、回答者が決める任意の4桁の番

号によって結合し、追跡調査とした。第一回目のデータのみを用いて重み付けの無い最小二乗法により初期解を求めバリマックス回転により因子分析を行った。この際、尺度使用時の利便性を鑑みて、項目数を可能な限り減らすこと、および測定する因子数を減らすことを検討した。

(4) 倫理的配慮

研究参加者に対するインフォームドコンセント及び個人情報保護への配慮に関しては、疫学研究に関する倫理指針、個人情報保護法に準拠し実施した。フォーカスグループインタビュー中の呼称は仮り名が使えるように配慮した。質問票調査では参加したくない人は白紙提出も可能である旨を説明し、依頼者全員に提出してもらうことによって、回答した人としていない人が調査参加者の間で特定されないように配慮した。個々の回答は研究者以外が閲覧できないように配慮した。同一参加者に対する追跡調査に関しては、研究参加者が任意に決める4桁の番号で2回の調

査結果を結合した。その識別番号から個人を特定できるような名簿の作成などは行わないものとした。また調査への参加不参加によって協力していただいた講義の成績などには一切影響しないことを質問票の表紙に印刷するとともに口頭でも説明を行った。本研究は金沢大学医学倫理委員会の承認を予め得た後に実施した。

4. 研究成果

(1) 質的方法によるリスク認知の解明

FGIを実施して得られた性に関するリスク認知に関するカテゴリー(構成概念)は、身近な経験、コンドームへの信頼、セーフターセックスへの自信、ローカス オブ コントロール、パートナーの感染可能性(特定の相手)パートナーの感染可能性(不特定の相手)、相手への信頼、結婚への期待、結果の重大性・不可逆性、流行に対する認識、将来への期待、恐怖であった。得られた概念ごとに質問項目を可能な限り挙げ、言葉使いなどの分かりやす

因子	項目	1	2	3	4
第一因子: 予防意図	妊娠を防ぐためにコンドームを使うことは当然のこと	0.79	-0.23	0.19	-0.05
	性感染症を防ぐためにコンドームを使うことは当然のこと	0.76	-0.18	0.24	-0.22
	絶対に望まない妊娠をしないように常に努めようと思う	0.68	-0.24	0.13	-0.06
第二因子: 予防行動の制御可能感	相手が嫌がるならコンドームを使わないことがあると思う。	-0.22	0.94	-0.08	0.10
	その場の雰囲気でもコンドームを使わないことがあると思う	-0.21	0.69	-0.01	0.04
	自分がセックスを望んでいないときはどんな状況でも断わることが出来ると思う。(逆転項目)	-0.10	0.43	-0.02	-0.12
第三因子: コンドームの外的効力感	コンドームを使うことは望まない妊娠の予防にとっても効果的である	0.22	-0.04	0.79	0.02
	コンドームを使うことは性感染症の予防にとっても効果的である	0.17	-0.04	0.79	-0.05
第四因子: 性感染症リスクの身近さ感	STD は今後も自分には全く関係の無いことだと思う。	-0.16	-0.08	0.08	0.77
	友人や知人が性感染症に感染してしまうことがあると思う。(逆転項目)	-0.04	0.02	-0.09	0.62
因子寄与率		18.9%	12.7%	20.2%	10.5%
因子抽出法: 重みなし最小二乗法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法 5 回の反復で回転が収束。					

さが尺度項目案としてふさわしいかについて検討を行い41項目が候補として残った。

(2) 暫定版「性に関するリスク認知」尺度の作成

本学で開講されている講義5つの協力を得て計460部を回収した。男性174名女性285名不明1名、平均年齢19.5歳であった。重み付けのない最小二乗法によって初期快を求めバリマックス回転により因子分析を行い、因子の解釈可能性から13項目5因子「リスクの身近さ」「コンドームの効力感」「コンドーム使用当然」「予防行動をコントロールする自信」「予防のためのアブスティネンス」が得られた。因子ごとのクロンバックの α 係数はそれぞれ0.7、0.85、0.83、0.83、0.94、累積寄与率は62.3%であった。これらを以て青少年の性に関するリスク認知の尺度案とした。

(3) 「性に関するリスク認知」尺度の評価

本学で開講されている講義3つの協力を得て、各講義10月および12月の2回調査を行ない、延べ515名からの回答を得た。1回目および2回目の両方に参加し、任意の番号によって前後データを識別することができた上、必要項目の回答に欠損がなかった回答は136名であった。参加者の属性は、男性59.6%女性40.4%、18歳から24歳までの平均年齢19.9歳(標準偏差1.0)であった。探索的因子分析の結果、暫定版に含まれていた「予防のためのアブスティネンス」を尺度から除き、10項目4因子の尺度を作成した。確認された因子とその内的妥当性(クロンバックの α 係数)は「性感染症リスクの身近さ感(0.79)」、「コンドームの外的効力感(0.68)」、「予防行動の制御可能感(0.88)」、「予防意図(0.72)」であった(表1)。信頼性を検討するために周辺等質性検定を用いて4因子の尺度得点を前後で比較したところ、何れの因子も有意ではなかった。これより信頼性を確認することができた。今後はこの尺度を活用し、効果的な介入内容と合わせて提供、評価を行うことのできるプログラムの開発が開発され、青少年の性に関する健康の増進に役立つ

ことが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

①Homma T, Ono-Kihara M (他8名, 1番目), Demographic and behavioral characteristics of male sexually transmitted disease patients in Japan: a nationwide case-control study., Sexually transmitted diseases 誌, 35巻, 990-996, 2008, 査読有

②Cong L, Ono-Kihara M (他8名, 7番目), The characterization of sexual behavior in Chinese male university students who have sex with other men: a cross-sectional study., BMC Public Health., 8巻, オンライン出版, 2008, 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本間 隆之 (HOMMA TAKAYUKI)

金沢大学・薬学系・助教

研究者番号: 90401893